

●竹島渡航日記 (三) 旅行者某生

▲雲行きを眺めて三日の間過したが實に此度の風は不運にも旋風と相違みかつた、廿四日には稍強い所の西風が吹いて居たが雲は東よりした間もあく此風は西北に轉し遂に東北とあり終つたのである此様を風の廻りは常にあること乍ら毎日島の月にかこつ場合であつたから一層よく觀察することが出来たのである兎に角之で最早や風は止まねばならぬ天候は大丈夫測候所の電報などは聞く必要はないとて自分で安心して居た廿六日午後六時半彌西郷を出帆し北を指して竹島に向つたのである、

▲廿七日 夜も明けた彼方に見ゆるとは竹島をらんぞと恐悦限りおし六時半の頃近づいて凡そ四里計りの所に至つた確かに之は此一行の目的物あるものに相違みかつた見も知らぬ所なれども此通りと事務長の自慢今尙見る機を心地がする實に其突兀たる布袋の機を二つの島が水平線の上に載つて居る様は廣く太平洋を床とした所の置物と相違みあかつた種々ある方面から眺め又踞つて拜したる様を氣持がした兎や角する内に三頭の大なるふかが表はれ頭を並べて船を襲ひ來るのてある之はふか／＼奇觀であつた四五間も近づいて夫れふか／＼と云ふ内に姿を失ふたのである、

▲あじかの經驗も富んで居らるゝ所の中井君は船首に居られたが此瞬間にそれあじかがと云ふ多數の人は俄かに船首を集まつて望遠鏡を取り出すと一時は騒であつたいかにも數千のあじかが禍色とあつて此方を眺めて居るらしいそれ又其處よと云ふ、ある程此場所にも數千のもの蛆の如くに群集して居る船が近づくに従つて彼れあじかは犬の長吠の様を異様ある聲を出してぼて／＼海中に落ちたのである此落ちた所のあじかは只頭だけ水面に擡げて彼方此方をさまよへ乍ら絶えず咆哮して居る彼等が遊泳して居る有様は恰かも海水沿場の浴客が競争でもする様に出没して居た、

▲竹島についた頃は丁度廿七日午前の八時半であつたが隠岐丸はやがて浪の少き岩陰に船を廻はした島から十町も離れたらんと思ふ頃船員は錘を垂れたが見る二十六尋の深さがある云つゝ居た隠岐の漁夫かららんいかの餌釣針を投じたものかあつたか忽ち一尺餘のかが様ある魚が釣れたのは特別なる興味を乗客 興へた此邊には筒様なる魚が頗る多いことである船を廻はさんとする瞬間にひら／＼と見くらあて

の遊ぶのを見たのは言はん方なく面白かり  
▲我輩は第一着に竹島に行かねばならぬと中島君は談して居たされどもくじらやいかあどが訪問をしはしかいかと眺め居る途漁船に乗り遅れたのは實に遺憾であつた面高君や中井君は今や漁夫を引き連れて彼方に漕ぎ行くことゝの羨やましさ、  
▲さて之をも眺すまして居る譯にも參らねば他の漁夫等を談してテンマに打ち乗りて隠岐丸を下つたのである觀音島の彼方より微風は吹き來つて、健は舷を打ち丁々たる船聲と相和して第一船の後を追ひおきたが劇しき潮汐に流され漁夫も稍困つたのである、